

## 小学校音楽科における「創造性」に関する一考察

大西 華恵\* 新山王 政和†

\*大学院学生

### A Study on 'Creativity' in Elementary School Music Department

Hanae ONISHI\*, Masakazu SHINZANO†

\*Graduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### 要 約

現在教育において「創造性」の育成が求められている。昨年12月21日に公表された中央教育審議会の答申において、「将来の予測が困難となっていく現在」において求められる資質・能力として「新たな価値を生み出す豊かな創造性」が示された。また、「創造性の整理」が、今後の時代に必要だともしている。そこで本稿では、教育における創造性の定義を試みるとともに、小学校音楽科における「創造性」について考察する。

まず、教育における創造性は『生産と再生産の繰り返し』であると考え、創造において重視すべきなのは「過程」であると考え、過程を経る中で多様に考え（思考）、試したり実践したりする（試行）ことで「創造」は成立する。ここでいう「生産」には思考と試行が含まれており、この生産をもとに新たなものを生み出すことが「再生産」である。そしてさらに、その再生産したものから新たなものを生み出していく。創造ではこれを繰り返していくのである。

そして、音楽科教育における創造性は『思考と試行の繰り返し』であると考え、音楽は、自由に思考し試行することができる「考える」教科だといえることができる。多分に「考える余地」があり、自分で考え、誰かと共に考え、知識や技能を元に考えるなど、様々な「考える」アプローチができる。

また、創造性は「音楽づくり」の領域のみで養えるものではなく、歌唱でも器楽でも、また鑑賞においても養うことができる。そのために、表現領域においては、考えること、実際にやってみることを効果的に繰り返す実践をすることで、鑑賞領域においては、ただ聴くだけではなく、「能動的」に聴くことが効果的だと考える。

Keywords : 創造性 小学校音楽科 過程

#### I 研究の動機

現在、教育において「創造性」の育成が求められている。昨年12月21日に公表された中央教育審議会の答申において、「将来の予測が困難となっていく現在」において求められる資質・能力として「新たな価値を生み出す豊かな創造性」が示され、一層教育においてこれらの育成が求められるようになったといえる。<sup>①</sup>今年3月に公表された次期小学校学習指導要領の総則では、「創造性の涵養を目指した教育の充実」に努めるべきとされており、児童は「豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待」されている。<sup>②</sup>今後の日本社会に必須の能力といっても過言ではない。

だが、この「創造性」というものの概念は、はっきりと定まっていない。その理由は、「関心がいろいろ

と対立しているから」だと考えられている。創造性は、「平和への欲求、経済的・科学的・軍事的な発展、知的構想への期待、生活の質の改善」など、創造性はあらゆるものを解決できるものと捉えられている。<sup>③</sup>創造性にかかる期待が大きいことが、この箇所から伺える。

そこで、本研究の目的を設定した。本研究の目的は、「創造性」の概念規定を行うこと、また、小学校音楽科において育成される「創造性」がどのようなものであるか、どのようにしたら身に付くのかをはっきりさせることである。創造性育成のために芸術系教科が重視されていることから、音楽科において創造性を育成するための方法を検討することは有意義なことであると考え、

#### II 「創造」とは何か

†音楽教育講座 †Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

まず、「創造」とは何かについて、辞書や先行研究等をもとに整理する。

## 1 「創造」という言葉の氾濫

現代の日本において、これらの言葉の氾濫は著しい。企業理念としてこれらの言葉を用いている会社も多く、以下はその一例である。（下線部筆者）

ファミリーマート基本理念<sup>(4)</sup>

私たちの行動指針

（中略）

- ・私たちは、グローバル展開しているチェーンとして、楽しさと新鮮さにあふれた生活と、夢のある社会の実現に向け、地域・社会の発展に貢献します。
- ・私たちは、倫理・法令を遵守し、オープンでフェアな事業活動を進めるとともに、地球環境保全・社会貢献に自主的かつ積極的に取り組み、社会から信頼されるチェーンを目指します。
- ・私たちは、一人ひとりの豊かな創造性とチャレンジ精神を何よりも大切にし、自らが「感じ」「気づき」「行動する」闊達な風土を育みます。

りそなグループは、創造性に富んだ金融サービス企業を目指し、お客さまの信頼に応えます。変革に挑戦します。透明な経営に努めます。地域社会とともに発展します。<sup>(5)</sup>

ここに挙げたのはごく一例だが、このような現象について、伊藤はこのように述べている。<sup>(6)</sup>

「創造性」とか「創造的」「創造」という言葉ぐらい、今いろんなところで使われる言葉もないのではという気がします。しかもほとんど中身をともなわないような、安易な使われ方がなされています。

（中略）これくらい、言葉と実態とがかけ離れているのもめずらしい。これを私は「創造性反比例」と呼んでいます。とにかく、本当は大事なことを指す言葉なのに、安易な仕方ですら乱用されていると、その意味がだんだんうすれていくというか、空気をむなしくふるわせるだけのからっぽの記号になっていく。つまり、その言葉が死んでしまうということが起こります。

また穂山は、創造という言葉の使われ方についてこのように述べている。<sup>(7)</sup>

- ・いかなる活動を「創造」と呼びならわしているかは、この言葉を使っている例を広く集めてみればよいが、この言葉がはじめて使われた時の意味を違えていることもあれば、きわめて多義的に利用していることもある

・創造と似ている活動、創造と関連がある活動、可能性として創造になりうる活動などを考えると、「創造」を広義に用いるほうが、視野の広さにふさわしくもある。このような言葉の使われ方は、大ぜいの人々の関心の現われであり、その多様さが全体としての意味を不明にすることはあるが、それだけ豊富な関係づけも行なわれている

これらの先行研究から、現代社会において「創造」という言葉が氾濫していることが窺えるし、筆者も同感である。

## 2 先行研究等における「創造」と「創造性」の意味

辞書で「創造」という言葉はこう記されている。

- ・模倣ではなく新しいものを造り出すこと<sup>(8)</sup>
- ・新しいものを初めてつくり出すこと⇔模倣<sup>(9)</sup>

また「創造性」は、こう記されている。

- ・新しい価値あるもの、またはアイデアを創り出す能力すなわち創造力、およびそれを基礎づける人格特性すなわち創造的人格<sup>(10)</sup>
- ・芸術や科学技術、社会の問題等について新しい発想や価値あるものを創り出す能力<sup>(11)</sup>

進藤は、創造性を「生来人間に備わっている新しいものを作り出す力」としてしている。また、「創造性」という語を、受動的にただ待っているだけで降臨してくるような神依りのものに祭り上げたり、「個性重視」のもとに、（あらぬ方向でさえ）仲間と違うことをした分だけ評価するような、歪曲した価値観で捉えたりするのではなく、子どもの内部に眠る創造性の種へ、様々な良いもの、美しいもの、感動体験を与えて、それを表現し共有する喜びを引き出すという働きかけをせねばならない」ともしている。それは各個人が「想像」をするため、「同じ体験を受けたとしても、各個人の創造に独自性が生まれる」としてしている。<sup>(12)</sup>

菅原は、創造における「知識」の重要性を述べている。「創造の過程とは、知識の獲得と同時に模倣の雛形に触れ、知識が消化される中で作品が生まれる過程と言え。大切なことは、知識を前提に創造性という能力が生まれてくる可能性が大きいということである」とし、「創造性支援とは、知識支援を前提にあくまでも「発想の可能性」を支援するということになる」としてしている。<sup>(13)</sup>

ここまでで分かることは、辞書の意味と先行研究において、「創造」の意味が異なるということである。辞書においては「0から1をつくる。何も無いところから初めて創り出す」という意味合いで、先行研究に



においては「1 どのし組合せ。組み合わせで、新しいものを創り出す」という意味合いで捉えられている。したがって、創造は、辞書の意味、すなわち言葉本来の意味で捉えられるべきではない。実体的なものとして定義し、実践できるようにするべきであると考え

### Ⅲ 先行研究における、音楽教育と創造性

教育において、芸術系教科での創造性の育成が期待されている。また、音楽と創造性の関係についての研究も多数存在する。以下、それらの抜粋を示しながら、音楽教育における創造性を見ていく。

#### 1 教育文書における音楽科の創造性

以下2つの文書において、芸術系教科における創造性育成の重要性が示されている。

##### (1) 中教審答申

前述の、昨年12月に出された中教審答申<sup>(14)</sup>においてはこのように述べられている。

また、我が国が、科学技術・学術研究の先進国として、将来にわたり存在感を発揮するとともに成果を広く共有していくためには、子供たちが、卓越した研究や技術革新、技術経営などの新たな価値の創造を担うキャリアに関心を持つことができるよう、理数科目等に関する学習への関心を高め、裾野を広げていくことも重要である。加えて、豊かな感性や想像力等を育むことは、あらゆる創造の源泉となるものであり、芸術系教科等における学習や、美術館や音楽会等を活用した芸術鑑賞活動等を充実させていくことも求められる。

ここで「創造の源泉」となるものとして「芸術系教科等における学習や、美術館や音楽界などを活用した芸術鑑賞活動等」が挙げられている。芸術系教科が、大きな成果を期待されているのである。

##### (2) 学習指導要領解説

今回、次期小学校学習指導要領総則の解説<sup>(15)</sup>において「創造性」の定義が出された。創造性とは、「感性を豊かに働かせながら、思いや考えを基に構想し、新しい意味や価値を創造していく資質・能力であり、豊かな心の涵養と密接に関わるものである」と定義された。(下線部筆者)昨年12月の答申において示された創造性等の資質・能力は、同答申において「整理を行い、学習指導要領等や解説に反映させていくこと」が要求されていた。<sup>(16)</sup>それが、ここで反映されたということができる。

また、「道徳教育や体験活動、多様な表現や鑑賞の

活動等を通して、豊かな心や創造性の涵養を目指した教育の充実に努めること」、「多様な表現や鑑賞の活動等については、音楽や図画工作における表現及び鑑賞の活動や、体育における表現運動、特別活動における文化的行事、文化系のクラブ活動等の充実を図るほか、(中略)学校教育活動全体として効果的に取り組むことも重要となる」ともしており、芸術系教科での育成の重要性がここから窺える。

音楽科の解説<sup>(17)</sup>には、このように記載されている。

音楽活動の楽しさを体験するとは、主体的、創造的に表現や鑑賞の活動に取り組む楽しさを実感することである。児童が体験する音楽活動の楽しさは、表現及び鑑賞の活動において、友達と気持ちを合わせて音楽表現をしたり、いろいろな感じ方や考え方等に接したり、表したい思いや意図をもって歌うこと、楽器を演奏すること、音楽をつくることができたり、音楽を味わって聴くことができたりしたときに、一層豊かになる。

このように「主体的、創造的」な学習をすることができるのは、音楽以外の教科も同じだが、音楽科がその代表格だということができるだろう。

#### 2 先行研究における、音楽科の創造性

ここでは、先行研究において音楽科における創造性がどう捉えられているかを、引用とともに挙げる。

##### (1) 音楽科における創造性

木村<sup>(18)</sup>は、音楽教育における創造性についてこのように述べている。(下線部筆者)

・“創造性を育てる音楽教育”などといっても、そういった特別な音楽教育があるわけではない。具体的には、教師が教材を選ぶときの配慮の仕方であり、学習過程をどう運ぶかというその運び方であり、学習指導における教師と子どものかかわり合い方であり、子どものアイディアをどう生かすかという、教師の態度や機知などの問題になってくる。要は音楽教育を実践していく上において、このようないくつかの観点を挿入することである。

・創造性は、たびたび述べてきたように、過去に習得した知識や技能などを駆使して、新しいものを考え出し、作り出す能力である。それは無から有を作り出すことではなく、あるものを作り変え、再構成する能力である。

音楽の創造的表現において、イメージを描く過程においても、またそのイメージを実現する過程において

もその“もとで”となるものは、音楽の知識であり、音感覚やリズム感であり、また歌ったり楽器を演奏したりできる技能である。

これらの視点は重要であり、「“創造性を育てる音楽教育”などといっても、そういった特別な音楽教育があるわけではない」というのは、その通りである。

また「音楽の知識であり、音感覚やリズム感であり、また歌ったり楽器を演奏したりできる技能」が元手として必要であるとの指摘も、重要なものである。確かに、そもそも音楽をする以上知識・技能が必要だし、知識や技能が無い状態で生まれたものは音楽と呼べないだろう。当然のようでもあるが、何もないところからは何も生まれないのである。「創造」の言葉に惑わされず、知識等を教えて、伝えるべきことは伝えたいので創造的活動を行うべきであることが、この箇所からも窺える。

『つくって表現しよう 創造的な音づくりの実践』<sup>(19)</sup>によると、「創造的な音楽学習」と「創造的音楽学習」は意味が異なるとされている。「創造的な音楽学習」は、子どもの創造性を生かしたすべての学習活動であり、「つくる活動だけでなく演奏、鑑賞なども含んで、子どもが主体的な活動、創造的な活動をするという学習のありかたを指すもの」である。そして、「創造的音楽学習」は、Creative Music Makingの訳であり、ジョン・ペインターの『音楽の語るもの』で初めて日本に紹介された言葉であるとしている。したがって、「創造的音楽学習」は、「様々な音を素材として、子ども自身が音楽をつくる活動」と位置づけられているという。音楽教育においては、ここでの「創造的な音楽学習」を行なうべきである。

また、本書のなかで坪能は、「「創造的な学習のありかた」と「子どもがつくる」ということを2つに分類して考えなければならない」ともしている。

## (2) 創造性とはマッチング

圓城寺ら<sup>(20)</sup>は、まず音楽における思考について、「実践をしている最中に働かせる直観的、創造的creativeな側面がより重要な役割を果たしている」としている。そして、音楽科教育についても言及し、「現在の音楽科においては、既存の音楽を形作っている要素を聴取・感受して言語化したり、「(作曲家の)思いや意図」を探ったりする鑑賞活動や、「(児童の音楽表現への)思いや意図」と技能や楽譜の理解を結び付けた表現活動、過去に作られた作品や規範を正しく理解して再現する活動が中心的な内容となっている」としている。今の音楽科教育では、「能動的に生活のなかで音楽とかかわったり、社会的な活動に音楽を活用していったりするような、創造的な能力の育成

にかかわる教育課程の検討は不十分である」としている。

そのうえで、「マッチング作業のプロセスに内在する創造性」について論じ、「異なる分野の表現を、ミクストメディアのリソース(素材)と見做し、その組み合わせを検討して全体を統括」とするものとした。

また、「こうしたマッチング作業の過程には、言語に置きかえ可能な論理的思考と、言語に置き換えることができない直観的思考の、両方が働いている。論理的思考と直観的思考は、柔軟に往還されるべきものであり、それは、音楽科特有の思考のありようの一端を示していると考えられる」と述べている。

## (3) 模倣との関係

ガードナー<sup>(21)</sup>は、創造性において「写實的」であることの必要性を述べている。

「写實的段階(literal stage)への一般的非難は心得違いのように私には思われる。芸術的進歩の敵となるどころか、写実主義はその尖兵となりうるのである。写實的段階で一般的になっているリアリズムにかかわることは、発達の最も重要な一面となりうるものである、というのもこの時期は原則を十分に習得する時期だからである。

これはすなわち、模倣が創造性にとって必要だとする考えであり、筆者も同感である。

これらすべての研究からも、創造を辞書の意味で捉えていないということが分かる。創造性は特別なものでも、0から1を生み出すものでもないし、創造には模倣も必要なものである。

## IV 音楽科における創造性とは

ここでは、前章までの先行研究を受けて、創造性の定義づけを試みる。

### 1 教育における「創造性」とは

まず、教育における創造性は、『生産と再生産の繰り返し』であると考えられる。

創造において重視すべきなのは「過程」であると考えられる。何かを生み出す時、過程が無ければ何も生まれない。創造においては、「ひらめき」が重要であると言われがちだが、そのひらめきも、無意識下での過程が存在していると考えられる。過程を経る中で多様に考え(思考)、試したり実践したりする(試行)ことで「創造」は成立するのである。

教育において創造性が育つ時も、これと同じである。子どもが過程において考え、実践することを繰り返していくことが、創造的な活動なのである。それを図にすると、以下のようなになる。



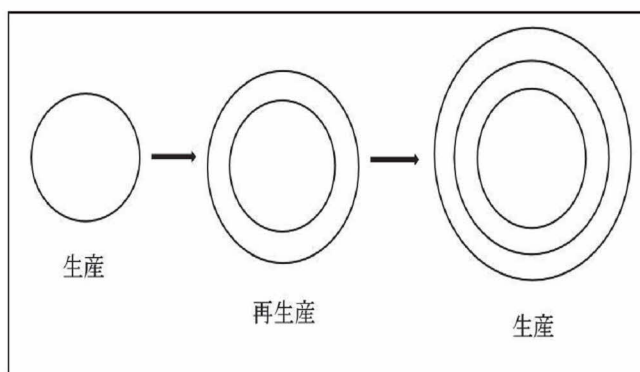


図1 教育における創造性の過程

このように、「生産→再生産」を際限なく繰り返すのである。この図における輪は、「過程の輪」ということができる。なので、これは実際にできるものの図ではなく、「考えの足跡」の図である。それらの積み重ねの作業が、創造なのである。ここでいう「生産」には思考と試行が含まれており、この生産をもとに新たなものを生み出すことが「再生産」である。そしてさらに、その再生したもものから新たなものを生み出していく。創造ではこれを繰り返していくのである。

また、知識を元にして思考し、実践し、実践したことを知識にして思考し、実践するプロセスともいうことができるため、知識基盤社会ならではの創造性の在り方だともいえる。

次期小学校学習指導要領総則の解説<sup>(22)</sup>での「創造性」の定義、「感性を豊かに働かせながら、思いや考えを基に構想し、新しい意味や価値を創造していく資質・能力であり、豊かな心の涵養と密接に関わるもの」にも合う定義だといえよう。

## 2 音楽科における「創造性」とは

そして、音楽科における創造性とは、『思考と試行の繰り返し』であると考えられる。それを図にすると以下のようなものである。

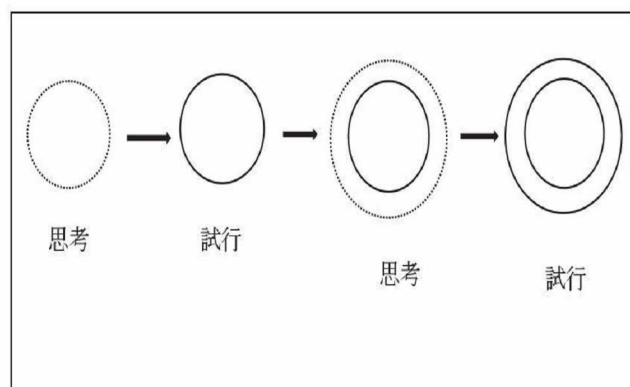


図2 音楽科における創造性の過程

この図における「思考→試行」の一組が、図1の

「生産」にあたる。つまり、図1は全ての教科を含めた、教育全体の創造性育成の図である。図1を構成するのが、図2のような各教科や各教育活動である。音楽科はこのような形で、創造性の育成に寄与する。

ここでの輪は「実践結果」だといえる。「思考」したことを「試行」することで形にし、実践結果として残す。そしてそれを、次の思考につなげていくのである。実践結果は、どのようなものでも結果として見なす。成功や失敗、所産の有無に関係なく、すべての実践結果である。

音楽は、このように自由に思考し試行することができる、「考える」教科だということができる。明確な答えが用意されていないため、多分に「考える余地」がある。自分で考え、誰かと共に考え、知識や技能を元に考えるなど、様々な「考える」アプローチができる。様々な教科のなかでも、音楽科において創造性の育成期待されているのは、音楽科のこのような特性によると筆者は考える。

また、創造性は「音楽づくり」の領域のみで養えるものではない。音楽づくりは「創造的音楽学習」がルーツであるため、混同して考えるべきではないし、そう考えると狭義になってしまう。既存の曲が対象でも、創造性の育成はできる。だから、歌唱でも器楽でも、また鑑賞においても、創造性を育てることができるのである。

このように、新しいものを作り出すことだけが創造ではなく、音楽活動のすべてが創造的な活動である。創造性を、限られた意味ではなく広い意味で捉えることが必要だと考える。

また、定義から分かるように、創造性を養うからといって、何か特別なことをするわけではないのである。大事なものは、「創造」という言葉に惑わされないことである。

## 3 指導要領解説の考察

以上の定義をもとに、次期小学校音楽科の学習指導要領解説<sup>(23)</sup>を見ていく。

### (1) 音楽づくりについて

まず音楽づくりの項目では、このような記述が見られる。(下線部筆者)

・音楽づくりの活動は、創造性を発揮しながら自分にとって価値のある音や音楽をつくるものである。

・音楽づくりの活動は、「音遊びや即興的に表現する」活動と、「音を音楽へと構成する」活動からなる。(中略)指導に当たっては、「音遊びや即興的に表現する」活動から「音を音楽へと構成する」活動へのつながりについても配慮する必要がある。

まず、音楽づくりは「創造性を発揮」するものであ

り、「価値のある音や音楽をつくる」活動だとしている。「価値のある音や音楽をつくる」のは、1度のひらめきや、数回の実践では不可能だろう。思考と試行を繰り返すべきという定義と合っている。

また、「つながり」のある活動であることも明記されており、音楽づくりも一連の活動だと見ることができる。ここでいう「音遊びや即興的に表現する」活動から「音を音楽へと構成する」活動へのつながりが、創造的な活動プロセスであるといえる。

## (2) 歌唱・器楽において

解説においては音楽づくりにおいてのみ「創造性」という文言が見られたが、前述した通りそのほかの領域でも創造性を育てることは可能である。それが、言葉では明記されていなくてもこのように書かれている。以下の通りである。（下線部筆者）

### A 表現

歌唱の活動は、自らの声で、曲の表現を工夫し、思いや意図をもって歌うものである。歌唱分野の内容は、次のように構成している。

ア 曲の特徴にふさわしい歌唱表現を工夫し、思いや意図をもつこと。（思考力、判断力、表現力等）

イ 曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解すること。（知識）

ウ 思いや意図に合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。（技能）  
（中略）

器楽の活動は、楽器で、曲の表現を工夫し、思いや意図をもって演奏するものである。器楽分野の内容は、次のように構成している。

ア 曲の特徴にふさわしい器楽表現を工夫し、思いや意図をもつこと。（思考力、判断力、表現力等）

イ 次の(ア)及び(イ)について理解すること。（知識）

(ア) 曲想と音楽の構造との関わり (イ) 多様な楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わり

ウ 思いや意図に合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。（技能）

歌唱も器楽も、まず「曲の表現を工夫し、思いや意図をもって」演奏すべきとされ、それから知識技能とある。ここでは「思いや意図をもって」がキーワードであり、「思考力、判断力、表現力等」の育成に取り組まれるようになっていくことが分かる。この思考、判断、表現する力こそが、創造性だといえることができる。思考し、判断し、表現し、それをもとにまた思考することを繰り返すことが重要であると考えられる。

## (3) 鑑賞において

鑑賞についてはこう記されている。（下線部筆者）

### B 鑑賞

鑑賞の活動は、曲想と音楽の構造との関わりなどについて理解しながら、曲や演奏のよさなどを見いだ

し、曲を全体にわたって味わって聴くものである。ア 曲や演奏のよさなどを見いだし、曲全体を味わって聴くこと。（思考力、判断力、表現力等）

イ 曲想及びその変化と、音楽の構造との関わりについて理解すること。（知識）

鑑賞の活動は、本来、音楽を全体にわたって味わって聴くことを目指すものである。そのためには、曲の特徴を手掛かりとしながら全体がどのようになっているのかを見通して聴くとともに、児童が思考し判断しながら自分にとっての曲や演奏のよさなどを見いだすことが大切なこととなる。したがって、アは、「曲や演奏のよさなどを見いだし、曲全体を味わって聴くこと」とすることによって、従前のア及びウの内容に対応する学習の一層の充実を図るようにしたものである。イは、曲想を感じ取って聴くことを独立した事項として示していた従前のアの内容なども含みつつ、従前、イ「楽曲の構造を理解して聴くこと」と示していた内容を、「知識」に関する資質・能力に対応する内容として示したものである。

「曲想」とは、その音楽に固有の雰囲気や表情、味わいのことである。この曲想は、音楽の構造によって生み出されるものであり、「音楽の構造」とは、音楽を形づくっている要素の表れ方や、音楽を特徴付けている要素と音楽の仕組みとの関わり合いである。曲想と音楽の構造の二つを相互に関連させることによって、鑑賞の学習が深まっていく。イは、その趣旨を明確にしたものである。

鑑賞の領域でも、「思考力、判断力、表現力等」の育成に取り組まれるようになっていくことが分かる。そして、下線部の部分が、創造的な、創造性を育む鑑賞であるといえる。「曲想と音楽の構造との関わりなどについて理解しながら、曲や演奏のよさなどを見いだし、曲を全体にわたって味わって聴く」ものだとしているが、これはただ曲を聴くだけでは、また、一度聴いただけでは達成できないだろう。思考を伴わせて聴いてこそ、また、考えたり確認したりしながら何度も聴いてこそ、達成できるはずである。鑑賞において、考えることは不可欠なのである。

「曲の特徴を手掛かりとしながら全体がどのようになっているのかを見通して聴く」こと、「児童が思考し判断しながら自分にとっての曲や演奏のよさなどを見いだす」ことも、鑑賞を「考えるもの」であることははっきり示している。

つまり、改訂された学習指導要領では、音楽科の全ての領域において創造性の育成が可能だといえることが



できる。思考が十分にでき、それを試行していくことができるからである。

しかし、解説には「音楽づくり」にしか文言が出ていないということは、まだ「創造性は全ての領域で育成すべき」であるという認識が薄いのだろう。

## V 各領域ごとの実践方法

音楽科の全ての領域で創造性を育成できるとした  
が、それぞれの領域でどう実践することで、創造性を育成できるだろうか。まだ検討が必要な部分ではあるが、筆者の考えを述べる。

### 1 表現領域において

表現領域においては、考えること、実際にやってみることを効果的に繰り返す実践が必要だと考える。

「歌唱、器楽」においては、どう歌うかを考え、実際に歌い、それをもとに、どう歌うかを考えていく。考える思考と実践する試行のどちらかに偏ることなく、バランスよく行うことが重要である。「音楽づくり」においても同様で、どう作るかを考え、実際に作り、それをもとにまた考えていく。このように思考と試行することを繰り返すことが、創意工夫である。方法としては、過程を記録していくことが重要であり、用いる道具も重要である。ICレコーダー、ビデオカメラ等の録音機器等が好ましいだろう。特別なものではないが、特別でないことが、これを繰り返していくことが、創造性育成において重要である。

### 2 鑑賞領域において

鑑賞領域においては、ただ聴くだけではなく、「能動的」に聴くことが必要だと考える。次期学習指導要領に示されている通りである。何故このようなメロディー・リズム・テンポ・強弱なのか、どうしてこの楽器が使われているのか、この曲を通して作曲者が伝えたいことは何かといったことを「思考」し、実際の曲を聴く「試行」を通して確認し、これを繰り返す。方法としては、書く活動や話し合う活動が重要であると考える。特別なことではないが、これらを繰り返すことで創造性の育成につながる。

この鑑賞の領域が、表現領域と同様に、場合によってはそれ以上に、創造性を育成できる領域であると考えられる。なぜなら、子どもにとって鑑賞は最も実践しやすい音楽活動だといえるからである。

「聴く」という行動は、歌ったり何かを演奏したりすること以上に子どもにとって慣れている活動である。生活の中でも実践しているものであり、最も子どもにとっては馴染みのあり、慣れた活動であるといえることができる。すでにある聴覚というツールを使って、音楽により深く、多様にアプローチすることができるのである。音楽を「聴く」ということは、もちろ

ん教師が教えなければならない。そうすれば、子どもは「音楽を聴く」という音楽活動を、演奏よりも歌うことよりも容易に習得することが出来るだろう。

### 3 評価について

そのような創造的な活動、「創造性」をどう評価するか、という問題も出てくるだろう。「過程を重視する」としたが、それをどう評価するのかを考えることも必要である。

筆者は、教師側と子ども側が両方評価を行ない、それを照らし合わせるのが有効だと考える。それは子どもの内でどのような考えがあるか、どのような学びが行なわれたかの過程を、より正確に把握するためである。子どもの内で「考え、試行錯誤した足跡が見られたか」、またさらに進んで、「考えたことを実行できているか」というところを見るべきだと考える。

教師側が子どもの考えの過程を知るためには、言葉で説明させる、ワークシートに記入させるなど様々な方法が考えられる。ここでは、より正確に効果的に、子どもの内的成長や考えの過程を知る方法が求められる。そして重要なのは、それらをどういう判断のもと評価するのかである。それは多分に、教師それぞれで異なってくるだろう。基準を設けても良いかもしれないが、それよりは、現場の教員が、それぞれ評価するのが良いと考える。音楽の授業以外での子ども一人一人の姿を知っている教員でなければ分からないものもあるだろう。

また、子ども自身での自己評価も重要である。創造性の育成の場合、教師側の評価よりも子ども自身での評価の方が重要だといえる。教師が拾うことも大事だが、教師が分からないところでの「過程」を知るためには、子ども自身が自分を評価しその結果を教師が知ることが効果的である。

これら両方の評価を突き合わせて、子どもの創造性の伸びを評価するのが良いと考える。もちろん、実際の技能をはかる評価も必要である。それと並行して、このような評価も必要であるということである。それに、創造性を各自が養っているなかで、試行したり再生産したりするために、技能は必要になってくるはずである。

## VI まとめ・考察

音楽科における創造性について考察した。創造性とは限られた場面で、限られた人にだけ発揮できるものではなく、それぞれが行うもの、言うなれば、今行っている活動そのもののことである。「特別なもの」では決してない。それは、心理学者マズローが創造性を「特別な才能の創造性」と「自己実現の創造性」に分けているとおりである。前者では、その創造活動は社会的に評価されるが、後者では、その人にとって価値

ある新しさが大切にされるという。<sup>(24)</sup>この後者が、学校教育では重視されるだろう。そのためには「個性重視」がなされていることが大前提である。そして、後者の創造性を実現することができるのが、音楽科なのである。

何か真新しいことをするのが「創造的な教育」ではない。創造性は「過程」において育まれるものであり、「過程」を作っていく力こそが創造性なのである。創造性は、「考えること、自分なりに工夫すること」だともいうことができる。明確な答えがない音楽において、過程を作っていくこと、考え自分なりに工夫することは重要である。

## Ⅶ 今後の展望

今後は、本稿で考察したことを実際の音楽の授業で実践していくことが求められるだろう。指導案の考案等を通して、実際の授業に還元する方法を考えていきたい。この定義の元では、多様な音楽の授業が考案されると思われる。創造性とは、様々なアプローチで養うことができるからである。

また、筆者の疑問は「なぜ“創造”という言葉を使うのか」というところにある。創造という言葉の意味と違って捉えられているにも関わらず、なぜこの言葉を当てたのだろうか。このことも、調査と考察を続けていきたいと思う。

## 引用参考文献

- (1) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(2016.12.21) 2017.10.12 閲覧
- (2) [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661\\_4\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf) 「小学校学習指導要領 第1章総則」文部科学省(2017.3) 2017.10.12 閲覧
- (3) 『最新音楽教育事典』大空社 1999
- (4) <http://www.family.co.jp/company/familymart/idea.html> ファミリーマート基本理念 2017.10.12 閲覧
- (5) <http://www.resona-gr.co.jp/holdings/about/rinen/index.html> りそなグループ経営理念 2017.10.12 閲覧
- (6) 伊藤進『創造性をみがくヒント』講談社 1998
- (7) 梶山貞登『創造性 現代の心理学 3』倍風館 1975
- (8) 『新潮国語辞典—現代語・古語—第2版』新潮社 1995
- (9) 『現代国語例解辞典第4版』小学館 2006
- (10) 『現代 学校教育大事典④』株式会社ぎょうせい 1993
- (11) 『教育学用語辞典 第4版』学文社 2010
- (12) 進藤務子「心をはぐくむ幼児音楽教育」2010
- (13) 菅原いづみ「音楽教育における知識・創造性支援」1999
- (14) 前掲書(1)
- (15) [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/07/12/1387017\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/12/1387017_1_1.pdf) 「小学校学習指導要領解説 総則編」文部科学省(2017.9) 2017.10.12 閲覧
- (16) 前掲書(1)
- (17) [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/13/1387017\\_7.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/13/1387017_7.pdf) 「小学校学習指導要領解説 音楽編」文部科学省(2017.9) 2017.11.1 閲覧
- (18) 木村信之『創造性と音楽教育』音楽之友社 1968
- (19) 『つくって表現しよう 創造的な音づくりの実践』音楽之友社 1992
- (20) 圓城寺佐知子他「音楽科の特性に応じた思考を育むカリキュラムの開発(3)創造的思考の相互交流から音楽表現へ」広島大学 2015
- (21) H. ガードナー、仲津・森島訳『芸術、精神そして頭脳 創造性はどこから生まれるか』黎明書房 1991
- (22) 前掲書(15)
- (23) 前掲書(17)
- (24) 前掲書(7)